# 知覚動詞補文と平行的多重構造

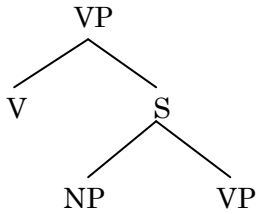
牛　江　一　裕*
(埼玉大学教育学部)

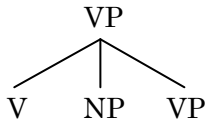
## １．知覚動詞の補文構造

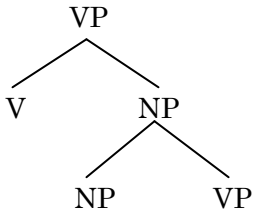
(1)にみられるような知覚動詞の補文構造については、生成文法の研究においてさまざまな提案がなされてきた。

(1) a. I saw John cross the street.
　　b. I saw John crossing the street.

(1a)のように目的語の後ろに原形不定詞を従える不定詞補文（Infinitival Perception Verb Complements, 以下IPVC）の場合と、(1b)のように現在分詞を従える分詞補文（Participial Perception Verb Complements, 以下PPVC）の場合とでは、構造が異なるという主張もされてきている。

(2) a.


b.


c.



(2a)の構造はBarss(1985)などで主張されているもので、知覚動詞に後続する連鎖が節的構造を成すとするものである。そのような構造と考える主な根拠の一つは、知覚動詞の後ろに原則的には文の主語としてのみ生起する天候のit、虚辞のitやthere、あるいは idiom chunk が起こり得るということであった。また、Tough移動規則など文に限って適用することが可能な規則が、知覚動詞補文においても適用されるということも、その根拠としてあげられていた。

(3) a. I saw *it rain(ing) outside*.
　　b. We heard *it chime one o'clock as I was turning out of the gate*.
　　c. We saw *there arise over the meadow a blue haze*.
　　d. I saw *the shit hit(ting) the fan*.
　　e. I've seen *John be hard to please before*.

これらの事実は、(3)における斜体部が節であり、知覚動詞補文が(2a)の構造を持つことを示している。

(2b)の構造は、Gee(1975)やAkmajian(1977)がIPVCの基底構造として仮定しているものである。この構造の必要性はDeclerck(1983)や榊原(1986)においても示されている。たとえ

ば、動詞直後の名詞句からその一部を取り出したとき、believe型動詞補文と知覚動詞補文とでは相違がみられる。このことから、(4a)は(2a)の構造を持つのに対し、(4b)のIPVCは(2b)の構造を持つとされる。[1]

(4) a. *Who did you believe pictures of *t* to be on sale?
b. Which actor did you see a friend of *t* talk to Mary? (Declerck (1983:115))

(2c)の構造はAkmajian(1977)がPPVCの基底構造としているものである。PPVC全体がNPとして動かされ得ることが、この構造を仮定する根拠となっている。

(5) a. The moon rising over the mountain is interesting to watch. (Object Shift)
b. The moon rising over the mountain appears to have been seen by many people last night. (Subject Raising)
c. What we saw was the moon rising over the mountain. (Pseudo-cleft)
d. The moon rising over the mountain, I've seen it often enough.(Dislocation)
(以上 Declerck (1982:3))
e. It was the moon rising over the mountain that we saw. (Cleft)
(Akmajian (1977:430))

これらの構造を仮定する分析には各々確かに正しいと言える部分があるが、いずれをとってもみても何らかの問題が残っており、知覚動詞補文の示す様々な特性を完全に説明できている分析とは言い難い。[2] Declerck(1982:2)が述べているように、これまでの分析は知覚動詞の補文構造を一元的なものとしてとらえ、IPVCやPPVCの持つ諸特徴を(それぞれ)ただひとつの構造ですべて説明しようとしているところに問題があると思われる。そのような一元的な分析に対し、榊原(1986)やDeclerck(1982)は知覚動詞の補文構造を多元的にとらえようとしている。榊原(1986)は、Kajita(1977)以来の動的文法理論の枠組に基づき、知覚動詞補文の基底構造を(6a)と仮定し、モデル依存の拡張により(6b)の構造が派生的に可能となるとする。

(6) a. V NP [$_S$ PRO XP ] (basic structure)
b. V [$_S$ NP XP ] (derived structure)

Declerck(1983)は、IPVCは基底構造として(2a)を持ち、Raisingにより(2b)の構造が派生されるとする。また、Declerck(1982)は、PPVCは場合により３つの異なった基底構造から派生されると主張している。

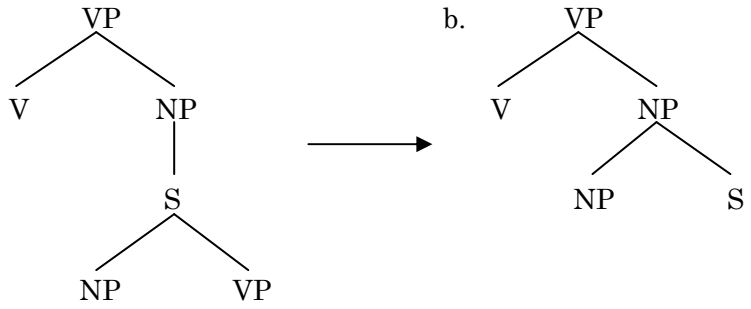
(7) a. I saw the moon rising over the mountain.
b. The moon rising over the mountain was seen by many people last night.
c. The moon was seen (by me) rising over the mountain last night.

彼の分析によれば、PPVCには次の３つの型がある。(7a)の第Ｉ型は、IPVCの進行相の対応物で(2a)の構造を持つとされ、(8)にみるようにIPVCとの等位接続が可能であると指摘されている。

(8) I heard someone coming and open the door.

(7b)の第Ⅱ型は、Declerck(1981)で主張されたpseudo-modifierの構造を持つもので、(9a)の構造を基底とし、補文のSからNPを抜き出しそのSの姉妹として付加するPseudo-modifier Creationという操作により派生される。

(9) a. b.




(7c)の第Ⅲ型は NP + predicative adjunct の構造で、(2b)の構造として基底生成される。Declerck(1982)の分析は興味深いものではあるが、3節で述べるとおりいくつかの問題点がある。また、pseudo-modifierの性格およびPseudo-modifier Creationという操作自体にも検討の余地がある。[3]

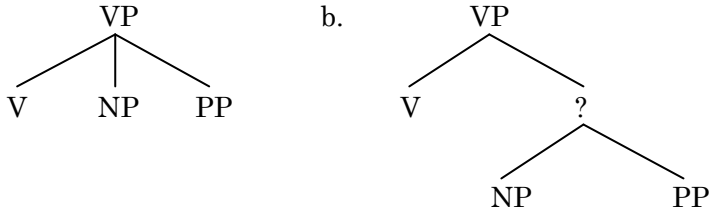
本稿は、Ushie(1994)において提案した統語的二重構造の仮説の線に沿って知覚動詞の補文構造をとらえなおし、平行的多重構造の仮説に基づく分析を提案して、知覚構文に対しより妥当な説明を与えようと試みるものである。

## ２．平行的多重構造

Ushie(1994)は、Goodall(1987)などで提案されている平行構造(parallel structures)が、統語分析としてより広い範囲で必要であることを示し、統語的二重構造の仮説を提案した。与格構文やbelieve型動詞の補文など(10)の斜体部は、構成素か否かという点に関して二重性を示す。そのゆるやかな構成素性を表すために、それらは統語構造として構成素を成す構造と成さない構造とを平行的に同時に持つとし、動詞句の内部構造に関して平行的二重構造の仮説を提案した。たとえば、(10a)の動詞句は(11)に示す２つの構造を平行的に持つ。

(10) a. John gave *the books to Mary*.
b. I believe *John to know French*.

(11) a. b.




この平行的二重構造の仮説の線に沿って知覚動詞の補文構造を考察してみると、二重構造を仮定しただけではとらえきれない現象が見受けられる。そこで、IPVCは(2a)と(2b)の２つの構造を、PPVCは(2a-c)の３つの構造を、それぞれ平行的・同時的に持つとする平行

的多重構造の仮説を提案する。[4] (2)の３つの構造は、１節で述べたことや３節で考察することなどから、それぞれ存在の証拠が得られる。[5] それらを別の派生における構造としてではなく、一つの文の派生において平行的に存在している構造であると考える。ただし、２つあるいは３つの構造を同時に持つといっても、知覚動詞補文のすべての場合に同じ平行構造が等しく存在していると主張しているわけではない。３節で見るように、知覚動詞補文はそれが現れる特定の位置・構文により、上で主張した構造のうちある構造を欠き、そのことからいくつかの派生的な特徴が現れてくる。(1)や(7a)のような基本的な知覚構文は、その構文が本来持つべき平行的多重構造のすべてを持つ無標の場合であると仮定する。それに対し、(7b)(7c)などは(2)の構造のうちの一部のみを持つ有標の構文である。また、平行的な構造の間の相対的な「強さ」に違いを認める。さらに、特定の文により、あるいは同じ文でも話者により、平行的な構造の間の相対的な強さに違いがでてくる場合もあると考える（Cf. Ushie(1994)）。

## ３．考察

本節では、２節で提案した平行的多重構造の仮説に基づく分析によって、知覚動詞補文の示す諸特徴がどのように説明され得るかを示す。

３．１．まず等位接続について考えてみよう。(8)でみたとおりPPVCとIPVCとはandによる等位接続が可能である。Declerck(1982:3)は、PPVCとIPVCが同じ第Ｉ型の構造を持つ（Sという構成素を成す）ので等位接続が可能であるとしている。彼はIPVCにおいてRaisingを仮定するので、基底構造での構成素のタイプの同一性ということから、(8)におけるandでの接続可能性を説明することになる。しかし、完全な構成素となっている構造であるにもかかわらず、IPVCとPPVCとは both-and によっては接続できない。

(12) *I heard both someone coming and open the door.

２節での平行的多重構造仮説をとれば、(10a)の与格構文などにおける等位接続の可能性に関するUshie(1994)での説明と同様の説明がここでも成り立つ。PPVCとIPVCはそれらが持つ平行的な構造のひとつとして(2a)という（Sという構成素を成す）同一の構造を持っている。andによる接続は、構成素を成す構造が平行的な構造の一部として存在していれば可能となるので、(8)は容認される。both-andによる接続は対象となる連鎖の厳密な（あるいは非常に強い）構成素性を要求し、IPVC,PPVCとも接続される連鎖が構成素でない(2b)の構造を持っているため、(12)は容認されない(Cf. McCawley(1988), Ushie(1994))。

andとboth-andでの等位接続には、さらに微妙な容認度における階層性がみられる。次の３種類の文を比較してみよう。

(13) a. John gave a book to Mary and a record to Bill.
b. *John gave both a book to Mary and a record to Bill.
(14) a. John saw Mary drink coffee and Bill eat pizza.
b. ?*John saw both Mary drink coffee and Bill eat pizza.

(15) a. John saw Mary drinking coffee and Bill eating pizza.
b. ?John saw both Mary drinking coffee and Bill eating pizza.

(13)～(15)において、andによる等位接続を含む(a)の文はいずれも可能であるが、both-andによる接続を含む(b)の文は、容認度が(a)に比べかなり低くなる。(13)～(15)の文はいずれも等位接続される連鎖が構成素を成す構造（(11b)または(2a)）を平行的な構造の一部として持っているため、上記の理由で(a)の文はいずれも容認可能となる。しかし、これらの文は構成素を成していない構造（(11a)または(2b)）も同時に持っているため、(b)の文は容認度が落ちる。ここで興味深いのは、(b)文の間の容認度にかなり明確な差があるということである。(13b)はどの話者にもまったく許容されないが、(14b),(15b)は(13b)ほどには悪くない。さらに、(14b)と(15b)は同程度に悪く容認されないと判断する話者もいるが、(15b)は(14b)よりもかなりよく、ほとんど容認可能であると判断する話者もいる。つまり、かなりの個人差が認められるが、まとめれば次のような容認度における階層性が存在していることになる。

(16) (13b)＜(14b)≦(15b)

この容認度の階層性はどこからくるのであろうか。(13)の場合、a book to Mary の部分が構成素となっている(11b)の構造は、(11a)に比べて相対的にかなり弱く、構成素となっていない(11a)の構造が優勢であるので、andでの接続(13a)は可能であるが、both-andでの接続(13b)はまったく不可能となる。(14)の場合は、知覚動詞の補部(IPVC)がＳという構成素を成している(2a)の構造が、(13)において(11b)が構造として持っている優勢度に比べ、より強いものとして存在している。そのため、both-andでの接続も、完全に容認可能とはならないまでも、(13b)に比べれば容認度がやや高くなる。しかし、構成素を成していない(2b)の構造も（同程度の強さで）平行的に存在しているので、まったく容認可能とまでは至らない。(15)の場合は、(2a-c)の３つの構造を平行的に持ち、そのうちの２つが構成素を成す構造である。そのため、連結される連鎖の構成素としての度合いが(14)に比べ総体としてより強いものとなり、話者によってはboth-andでの接続もほとんど容認可能となる。平行的な構造相互間の相対的な強さ、あるいはboth-andによる接続という操作において要求される連結される連鎖の構成素性の度合いには個人差があり、それによって(14b)と(15b)の間に容認度における判断の差が出てくる。both-andによる接続に厳密な構成素性を要求し、(14b)と同様に(15b)を悪いとする話者と、その制限がよりゆるやかで、(14)と(15)の構成素性の違いを反映して(14b)より(15b)のほうがよいとする話者が存在するのであろう。このように、平行的多重構造を仮定すれば、(13)～(15)などに観察される容認度の判断の差あるいは揺れに対して、平行的な構造の間の相対的強さの差による説明が可能となる。このような揺れがあるということ自体、ここでの平行的多重構造仮説を支持するものであると言える。

(15)は進行相の意味を持つので、Declerck(1982)における第Ｉ型にあたる。彼の分析では(14)のIPVCと(15)のPPVCは基底においては同一の構造を持つことになるので、基底構造では上記のような両者の間の差を説明することはできない。PPVCは(2a)の構造であるが、IPVCの場合はRaisingにより(2b)の構造を持つので、派生構造において構成素を成しているかどうかということの違いにより、両者の差を説明しようとするかも知れない。しかし、

それでは(8)が可能であることの説明がつかなくなってしまう。また、この説明では基底構造と派生構造の両方に言及することにより等位接続の可能性が決まることになり、ある文法操作を行うとき、その対象となる文の派生における複数の異なるレベルを同時に見ることができるようにしなければならない、という問題が生じる。それだけではなく、上記の容認度における個人差を説明するためには、あるレベルの構造をより重点をおいてみることができるように、また重点の置き方に個人差を認めることができるようにしなければならなくなる。

３．２．次に知覚動詞補文の意味解釈について考える。Declerck(1982)の分析では、(7a)は(7c)が持つ構造も別の基底構造として持っており、両義的であるとされる。しかし、ここでの両義性は、いわゆる構造的多義性の場合のようなはっきりとした意味の区別のある両義性ではなく、渾然一体となった意味の多重性であり、各々の派生が反映しているはずの意味解釈上の違いをはっきり区別することは難しい。平行的多重構造を仮定すれば、ひとつの文の同じ派生のレベルにおいて同時に２つ以上の構造が平行的に存在しており、そのいずれもが意味解釈に関与すると考えることにより、(7a)などが渾然とした多重的な意味解釈を持つという直感をより直接的に表すことが可能となる。(2b)の構造は、目的語の名詞句が直接知覚の対象となっている解釈に対応する構造である。それに対し、(2a)は補文全体によって表される出来事・行為が知覚の対象となる場合の解釈に対応する構造である。(1)や(7a)のような普通の知覚構文の場合には、これら２つの意味がはっきりとは区別できず一体となっている。それぞれの意味に対応した構造を同時に持つとする平行的多重構造分析は、意味的側面においてもそのような言語の実態を表すことが可能である。

また、IPVCとPPVCとでは意味の重点のある場所が異なり、PPVCでは目的語に重点がおかれる、と指摘されることがある。PPVCにおける動詞直後の名詞句は、(2b)の構造において動詞の直接目的語であると同時に、(2c)の構造においてはNPの主要部である。PPVCは(2c)の構造を持たないIPVCとその点で異なっている。そのため、動詞直後の名詞句は、IPVCに現れた場合よりもPPVCに現れた場合の方が直接知覚の対象としての立場がより強くなる。このことから、上記の意味の重点のおかれかたの差が出てくる。

３．３．知覚動詞が能動文で用いられた場合、知覚作用の直接対象となるのは、一般的には動詞直後の名詞句であるが、必ずしもそうでなくともよい。(17)の文は、子供達からTomが直接見えないような状況においても用いることができる。

(17) The children watched Tom moving the puppets. (Declerck (1982:12))

また、(18)においては、必ずしも the farmer が音を立て、Mary が匂いを発したという含意はない。

(18) a. We heard the farmer killing the pig.
b. We smelled Mary beeswaxing the floor.

(3)や(19)では、動詞直後の名詞句自体は知覚作用の直接対象とは解釈できず、知覚の対象

は知覚動詞補文で表される出来事・行為全体である。

(19) a. I have seen faith accomplish miracles.
b. We noticed allowances being made for the very young.
c. I saw the invisible nerve gas kill the sheep.
d. I felt John hitting me with a rock.

(7c)で示したように、普通の知覚構文では直接目的語を主語とした受動文が可能である。そのような受動文においては、主語は直接知覚されるものでなければならないという制限がある。(20)では、(18)とは異なり、主語が動詞の表す知覚作用の対象となっていることを含意する。つまり、the farmer は何らかの音をたて、Mary は匂いを発したという含意がある。

(20) a. The farmer was heard killing the pig.
b. Mary was smelled beeswaxing the floor.

(3)や(19)に挙げた種類の文では、主語が直接知覚の対象になり得ないので、この制限によりそれらに対応する受動文は非文となる。

(21) a. *It was seen {raining / to rain} violently outside.
b. *There was seen to arise over the meadow a blue haze.
c. *The shit was seen {hitting / to hit} the fan.
(22) a. *Faith has been seen accomplishing miracles.
b. *Allowances were noticed being made for the very young.

受動文におけるこのような制限は何に由来するのであろうか。ここで、受動文の主語になり得るのは、対応する能動文において目的語の位置に現れる名詞句、つまり(2b)の構造におけるNPのみであると仮定する。補文の主語として現れる名詞句は受動文の主語とはなり得ない。言い替えれば、受動文の基となる構造は(2b)の構造であり、(7c)や(20)の受動文では(2a)(2c)の構造を(2b)と平行的に持ってはいないと考える。3.2節で述べたように、(2b)の構造は目的語が直接知覚の対象となっている解釈に対応する構造であるので、(2b)の構造を基に派生された受動文では、主語は必ず動詞の直接知覚の対象となる。(18)のように、能動文において目的語が直接知覚されるかどうかどちらの可能性もある場合には、(20)の受動文になると直接知覚の意味しかなくなる。

(21)にあげた受動文が不可能であることは、(3)の文における動詞句は、(1)の知覚補文とは異なり、(2b)の構造を持たないということから自動的に説明できる。存在文のthereや天候のitなどは文の主語位置にのみ生起し、補文の主語として現れることは可能であるが、基底構造における直接目的語などとして生起することはできない。したがって、知覚動詞の後ろにそれらの要素が現れている文は、Sを補部とする(2a)の構造のみを持ち、動詞の姉妹としてNPが目的語の位置にある(2b)の構造を持ち得ない。そのため、受動文の基となるべき構造がないので、(21)は非文となる。また、(19)の受動文である(22)が不可能であることも、同じように説明することができる。(3)や(19)の類は、直観的にも知覚構文の典型とは

感じられず、事実としても(21)(22)でみられるように通常の知覚構文とは振る舞いが異なる。これは、普通の知覚補文が持っている(2b)の構造を欠いているという点で、(3)や(19)は特殊で派生的な構文であることの現れであると言える。このように、平行的多重構造を仮定することにより、受動文が可能な場合と不可能な場合とを(2b)の構造の有無により区別できると同時に、受動文の主語は直接知覚されなければならないという制限がなぜあるのかという問にも答えることができる。

さらに、次のような事実も知覚動詞の受動文が(2b)の構造を基に派生されることから説明される。

(23) a. The guard saw John leaving the premises twice last week.
b. *The guard saw John twice last week leaving the premises.
(24) a. *Kissing her new boyfriend, someone saw Diane.
b. ?Kissing her new boyfriend, Diane was seen. (Declerck (1982:17))

(24a)と比べ受動文の(24b)において分詞形動詞句が前置しやすいは、基の構造である(2b)において、VPがNPと独立して知覚動詞の補部となっているからである。(24a)の場合も(2b)の構造を持ってはいるが、VPが独立した補部となっていない(2a)(2c)の構造があるため、(2b)の優勢度がそれだけ低くなり、その影響で分詞形動詞句を前置できない。また、(23b)で示されているように、副詞句がPPVCの名詞句と分詞の間に入り得ないのも、PPVCが(2a)と(2c)の構造を持っているため、主節の要素が不適切な位置にはいりこむことになってしまうからである。(7c)でみられるように、by meなどの句が分詞の前に入り得るということも、能動文の場合とは異なり受動文が(2b)の構造を持つことを示していると言えよう。[6]

３．４．次にPPVCが主語となっている受動文について考えてみよう。(7b)や(25)にみられるように、基本的にPPVCは主語位置に生起できる。

(25) John stealing apples was seen by the neighbors.

しかし、(3)や(19)でのPPVCは主語の位置に起こり得ない。

(26) *It raining violently outside was seen by everyone last night.

２節で述べたように、基本的なPPVCは(2a-c)の３つの構造を平行的に持つ。また、主語の位置には基本的に名詞性の高い要素が要求される。(7b)や(25)が可能であるのは、PPVCが(2a)の構造とともに(2c)の構造を持つことによる。PPVCの持つ平行的な３つの構造のうち２つにおいてNP+VPという連鎖が構成素となっており、それだけ構成素性の度合いが相対的に強くなっていること、そして(2c)を持つことによりその構成素のNP性が高くなっているため、主語として生起可能となる。それに対して、3.3節で述べたように、(26)の基となる(3a)などは有標のPPVCであり、(2a)の構造のみを持ち(2b-c)の構造を欠いている。したがって、（次のIPVCの場合と同じく）受動文の基となるべきNPとしての十分な構造が存在しないため、(26)のような受動文は派生され得ず容認不可能となる。[7]

IPVCは受動文の主語として現れることはできない。

(27)　*The moon rise over the mountain was seen by everyone last night.

IPVCもＳという構成素を成している構造(2a)を持つが、(2c)を持たない。そのため、受動文の主語の位置に起こるには構成素としての強さとNP性の度合いという点で十分ではなく、(27)は非文となる。さらに、bare S の生起に関する別の制限によっても、IPVCは主語として生起できなくなっているものと思われる（cf. 牛江(1993a:13), Ushie (1994:561)）。

PPVCの構成素性の度合いの強さとその構成素のNP性の高さは、(5)でみられるような操作がPPVCに対して適用可能であることからも確認される。それに対し、IPVCの構成素性とNP性の度合いはそれらの規則が要求する水準に達しておらず、IPVCに対してはそれらの規則が適用されない。そのため、(5)の文におけるPPVCをIPVCに置き換えるといずれも非文となる。[8]

小節(small clause)も主語として現れることがあり、そのことは小節が構成素を成している証拠としてあげられる。

(28)　a.　Workers angry about the pay {is just / does not seem to be} the sort of situation that the ad campaign was designed to avoid. (Safir (1983:732))

b.　Max (still) afraid of flying is a laughable thought.

(McCawley (1983:286))

小節が主語として許されるのは動詞がbeなど連結詞(copula)である場合に限られ、一般の動詞の主語としては起こり得ない。

(29)　*Workers angry about the pay pleases Maybelle immensely.

このごく限られた述語の場合にのみ主語の位置に現れることができるという制限は、小節の（NPとしての）構成素性が完全なものではなく中間的なものであることを示している。

Ushie(1994)は、動詞の補部としての小節は平行的な２重構造を持つと主張した。しかし、基本的な動詞句内の小節やPPVCとは異なり、主語の位置に現れた小節の場合は(2a)と類似の[$_S$ NP XP ]という構造のみを持つ。動詞が連結詞の場合は、構成素でさえあれば主語はNPではなくＳであってもよいので、小節が主語として生起できるが、その場合の小節は(26)と同様に(2c)のNPとしての構造を持っていないので、知覚動詞の受動文の主語としては許容されない。[9]

(30)　*Jane nude was seen by everyone.　(榊原(1986:10))

また、小節が主語に現れたとき常に単数形動詞と呼応するということも、(28)における小節が(2a)の構造のみを持ち、(2c)の構造を持たないことの証拠として挙げることができる（3.5節参照）。

３．５．Akmajian(1977)が指摘しているように、PPVCのNPが動詞との数の一致を引き起こす場合がある。[10]

(31)　a.　The moon and Venus rising in conjunction {have /*has} often

been observed by the astronomers at Kitt Peak.

b. The moons of Jupiter rotating in their orbits {are /*is} a breathtaking sight. (Akmajian (1977:432))

それに対して、NPが複数であっても動詞は単数形となる場合や、単複どちらもとるという場合もしばしば見られる。

(32) a. The two of them playing together {has/?have} seldom been observed by us.

b. Your teachers quarreling with each other last night {has / have} been overheard by some of the students. (Declerck (1982:6))

Declerck(1982:6)は、単数形・複数形動詞いずれとも呼応する場合があるという現象は、pseudo-modifierによる分析でのみ説明可能であると主張し、単数での一致がしばしば可能であるのは、PPVC全体がＳから派生されることの反映であるとする。しかし、彼の分析では数の一致をどのレベルの現象として扱っているのかはっきりしない。数の一致は表層構造に近い段階で行われると考えるのが一般的であるが、Declerck(1982)の分析では、場合により(9a)という基底構造を反映して動詞形が単数に決まることもあり、Pseudo-modifier Creationが適用された後の(9b)という派生構造によって動詞形の単複が決まることもあるということになってしまう。

平行的多重構造の仮説に立てば、(31),(32)などにおいては前述のとおり(2a)と(2c)という平行的な構造が存在しているので、(2a)の構造において全体がＳであることをうけて単数動詞形となる場合と、(2c)の構造によりNPの主要部の数に一致して動詞の単複の形が決まる場合との両方が（場合により）ありうることになる。その文全体の意味解釈や文脈などから、知覚の対象がPPVC全体ととられやすいか、あるいは主要部の名詞句を中心として解釈されやすいかというようなことから、その特定の文においてどちらの構造が相対的により強いかということが決まり、それによって動詞が単複どちらの形で呼応するかが決まる。また、どちらの形で呼応するかという点については、話者の間でかなり揺れがみられる。これも、平行的な構造のうちどの構造がより強いかということが話者の間で異なり得るので、そのような個人差が現れてくる。

## ４．結語

本稿では、知覚動詞の補文構造に対して、IPVCは(2a)(2b)の２つの構造を、PPVCは(2a-c)の３つの構造をそれぞれ持つ、という平行的多重構造仮説に基づく分析を提案し、それによって知覚動詞補文の持つ様々な性質が説明可能であることを示してきた。PPVCがIPVCの持たない(2c)の構造を３つめの構造として持つと仮定することにより、PPVCの構成素としての度合いの強さ、その構成素のNP性の高さ、そしてNPとVPとの間の(pseudo-modifier的な)意味関係など、IPVCとの相違点が説明できる。また、(2a)(2b)の２つの構造を共通して持つということにより、２つの構文の共通点も説明できる。このように、平行的多重構造を仮定することにより、ある構文の構成素構造に関する相反した事実を矛盾なく説明で

きると同時に、ある連鎖の構成素としての度合い、そしてその構成素のある範疇としての度合いという、中間的・階層的な性質を適切にとらえることができる。

平行的多重構造をまったく無制限に自由に仮定するのではなく、その可能な範囲を必要以上に広げすぎないよう狭く限定して、十分に制限された説明力の強い理論としてゆく必要がある。そのためには、どのような構文がどのような場合に平行的多重構造を持ち得るのか、平行的多重的に持ち得る構造の数はどこまで可能なのか、また、同時に持つ構造としてどのような対応関係の構造が可能であるのか、など明確にすべき多くの問題点が残っている。これらの点を解明するためには、今後の様々な構文についての広範囲で詳細な研究が不可欠であるが、平行的な構造がどのような文法的メカニズムによって派生されるかということから、これらの問題が解明される可能性が高いと思われる。

知覚動詞補文の平行的多重構造の派生、つまり知覚動詞の補部がなぜ、そしてどのようにして平行的な多重構造を持つに至るかということについては、Ushie(1994)で示唆した可能性がここでもあてはまるであろう。

(33) a. V NP
b. V NP XP
c. V [$_{\alpha}$ NP XP ]

言語習得の過程のある段階において、(33a)のような動詞の後ろに目的語のNPが続く基本的な構造が習得される。次の段階として、(33b)のようにNPの後ろにそれと並列的な関係で別の要素XPが加わり、より複雑な動詞句の構造が可能となる。さらに習得段階が進むと、NPとXPとの間の意味関係からそれらが構成素として組み替えられ、(33c)で表される構造となる。その際、αがどのような範疇となるかは様々な要因によって決定される。NPとVPが主語・述部の関係にあることから、αがＳとなった場合のひとつが(2a)の構造である。状況によりαはＳ以外の範疇にもなり、NPとなった場合のひとつが(2c)の構造である。PPVCの持つ平行的構造のひとつが(2c)となることには、榊原(1986)が示唆しているようにAcc-ing構文の存在が大きな要因となっていると思われる。また、動名詞など他の分詞形の存在も関係しているかも知れない。このような他の構文との相互作用については今後詳しく検討してみる必要があるが、ある言語におけるある習得段階において、他の構文がどのような状態で存在しているかということが、平行的多重構造を派生させる大きな要因となっている可能性が高く、その点で動的文法理論の考え方が有効であろう。

句構造に関しても、多重構造の一部として(2c)のようなX-bar理論の式型に合わない構造を仮定してきた。しかし、どのような句構造でも可能と示唆しているわけではない。一般的なX-bar理論では許されない構造であっても、平行的多重構造が派生される過程により、ある特定のものだけが派生的に可能となると思われ、そのようなことが自然に出てくるように派生のメカニズムを考えてゆく必要がある。

３節での議論において、平行的多重構造全体がある操作の適用可能性に関わってくる場合（等位接続など）もあれば、多重的な構造の一部がある操作の適用可能性を決定している場合（受動文など）もあることを見た。どの構造がどのような種類の操作に関与するかという、平行的多重構造と文法操作の間の関係についても、さらに掘り下げた検討を行い、

両者の関わり方についてより明確な仮説を立てることが重要である。[11] また、本稿の分析では、異なる構文の間で、あるいは同じ構文であっても特定の文や話者により、平行的な多重構造相互間の強さに違いがあるとしてきた。[12] 文や話者の間に規則的・階層的な容認可能性の揺れがあるというのが言語の実態であるならば、そのような揺れの存在を説明できるようなメカニズムを含んだ文法理論が求められる。この点でも、統語分析の新しい一つの方向を示すものとして、平行的多重構造を含んだ理論の可能性を検討してみる意味がある。

## 注

*本稿の作成に当たり有益なコメントをいただいたSherman Lew氏と今西典子氏に感謝する。また、本研究は文部省科学研究費補助金（一般研究(C),課題番号05610382）の援助を受けて行われた研究の一部である。

1 (4a)と(4b)の違いについては、注12を参照のこと。

2 IPVCの諸分析の比較検討についてはDeclerck(1983)を、PPVCの分析についてはDeclerck(1982)を参照されたい。Akmajian(1977)の分析の問題点については、Gee(1977), Barss(1985)も参照のこと。

3 Hayashi(1986)を参照。

4 ここでの句構造は簡略化した形で表されている。たとえば、V+S を直接支配している節点がVPであるのかV'であるのかというようなことは、ここでの議論に直接関係しないので、簡略化してVPと表示している。また、牛江(1986, 1994a,b)で議論したように、ＳはIPではなく外心構造であるという立場をとる。また、Chomsky (1993), Chomsky and Lasnik (1993), Kayne (1994) などで採られている、統語構造は binary branching のみ許されるという仮説も、ここでは前提としていない。さらに、ここでの句構造は通常のX-bar理論には合わない構造を含んでいる。４節で述べるようにこれらの構造はある意味で「派生的」なものであるが、とりあえずこれらの構造も許されるゆるやかな句構造の理論を仮定しておく。

5 (2c)の構造におけるNP内のVPは、制限的関係節でも非制限的関係節でもなく、また、NP全体として動名詞でもない。(2c)が正確にはどのような構造であり、どのような意味関係を持つのかはっきりしないが、とりあえずDeclerck(1981)におけるpseudo-modifierに近いものと考えておく。

6 ただし、調べた限りでは、現在分詞の前に時を表す副詞的要素が入ることはできない。

(i) *John was seen yesterday driving a new car.

7 Declerck(1982:10)は、PPVCが主語となっている場合は(9b)の構造を持つため、次の

文はComplex NP ConstraintあるいはSubjacencyにより排除されると主張する。

(i) a. *Which mountain was the moon rising over observed by many students last night?
b. *The mountain that the moon rising over was observed by many students last night is called Mount St. Patrick.

それに対して、PPVCが動詞の後ろにある場合は(9b)ではなく(2a)の構造であるので、名詞句の取り出しが可能であるとする。

(ii) a. Which mountain did John see the moon rising over?
b. The mountain that John saw the moon rising over is called Mount St. Patrick. (Declerck (1982:10))

そして、(i)の文のPPVCが(2c)の構造であれば(i)と(ii)の差が説明できないので、(9b)の構造が支持されると主張している。しかし、(i)におけるPPVCが(2c)の構造を持つと仮定しても、そこからの取り出しは Subject Condition 等により排除されることになるので、(9b)の構造の存在を支持する証拠とはならない。

8 (5d)のようにPPVCのDislocationは可能であるが、Topicalizationは容認されない。

(i) *That girl playing outside, I've never seen. (Declerck (1982:22))

このことは、PPVCのNP性の度合いがDislocationという操作に対しては十分であるが、Topicalizationは移動される要素により強いNP性を要求し、PPVCではまだ不十分であるのかも知れない。もしそうであるなら、その対象となる連鎖の（NPならNPという）範疇としての度合いの強さについて、似たような文法規則の間でも要求度に差があるということの例であるといえる。なお、(2b)の構造を基にしてそのNPを話題化することはできる。

(ii) a. That girl, I've never seen playing outside.
b. The moon, I'd love to see rising over the mountain. (Akmajian (1977:438))

また、(5c)や(iii)のPseudo-cleftにおいては、PPVCは必ずしも進行形の意味を持たない(cf. Declerck (1982:3-4))。このことも、(2c)の構造の存在によって出てくる性質である。

(iii) What I heard was John tapping on the window. (Declerck (1982:3))

9 IPVCと小節ではPseudo-cleftの可能性に関して違いがみられる。

(i) a. *What we saw was John cross the street.
b. What we saw was Jane nude. (榊原(1986:9))

ここでも何らかの bare S の生起に関する制限が働いているものと思われる。

10 この文法性の判断はAkmajian(1977)のものである。たとえば(31a)においてhasを選ぶ話者もおり、このあたりの判断にはかなり個人差がある。

[11] Pesetsky(1995)は統語構造として Cascade Syntax と Layered Syntax という Dual System を仮定する。そして、それぞれの構造に課される条件と２つの構造の間の対応原則、およびふたつの構造の役割分担についての仮説を提示している（Pesetsky (1995:Ch.7)）。この点で、PesetskyはGoodall(1987)や本稿での分析より一歩踏み込んだ提案をしていることになる。ただし、平行的な構造の間に相対的な強さの違いがあると主張する点で、本稿での分析はPesetsky(1995)のものと大きく異なる。

[12] 動詞句内でどの程度まで平行的多重構造が可能となっているか、という点でも個人差がありそうである。たとえば、話者によってはprevent類の動詞の補文にまで二重構造が広がっており、(2a)に類似した構造をも持つためthereなどが許されるのであろう（cf. 稲田 (1989:59-60), (　)の中は稲田氏のインフォーマントの判断）。

(i) a. (?)Wyatt Earp prevented there from being trouble on the range.
b. (?)Shelters will not prevent there from being great destruction.
(Rosenbaum (1967:91))

(ii) a. (*)I prevented tabs from being kept on Lucy.
b. (?)We must prevent any heed from being taken of his suggestions.
(Postal (1974:159))

しかし、普通prevent類は受動文を許すが、(i)(ii)を受動文にすると容認されないか、容認度が非常に落ちる。

(iii) a. *There was prevented from being a riot.
b. *Tabs were prevented from being kept on Lucy.

これは、文の主語として現れるというthereなどの性質により、(i)や(ii)の動詞句は(2a)に類似した構造のみを持つことになり、受動文の基となる(2b)に類似した構造を持たないためである。

また、異なる構文間の平行的多重構造の強さの違いは、(4a)のbelieve型動詞補文と(4b)の知覚動詞補文の間にも見られる。本稿ではIPVCは(2a)と(2b)の構造を平行的に持つと主張した。Ushie(1994)では、believe型動詞補文も同じく(2a)(2b)という２つの構造を持つとした。しかし、(4)で示したように、両者はWh移動に対して異なった振る舞いをみせる。(4a)と(4b)の容認度の差は、believe型動詞が不定詞補文を従えている場合、(2a)の構造に比べて(2b)の構造がかなり弱いものであること、そしてそれと連動して、(4b)と比べ(4a)では(2b)の構造が弱いということからくる。

## 参考文献

Akmajian, Adrian (1977) "The Complement Structure of Perception Verbs in an Autonomous Syntax Framework," Culicover et al., eds. (1977), 427-460.

Barss, Andrew (1985) "Remarks on Akmajian's 'The Complement Structure of

Perception Verbs' and Gee's 'Comments on the Paper by Akmajian'," *Lexical Semantics in Review*, ed. by Beth Levin, 149-165, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters," *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research* Vol.1, ed. by Joachim Jacobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Stemefeld, and Theo Vennemann, 506-569, Walter de Gruyter, Berlin.

Culicover, Peter W., Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, eds. (1977) *Formal Syntax*, Academic Press, New York.

Declerck, Renaat (1981) "Pseudo-modifiers," *Lingua* 54, 135-163.

Declerck, Renaat (1982) "The Triple Origin of Participial Perception Verb Complements," *Linguistic Analysis* 10, 1-26.

Declerck, Renaat (1983) "The Structure of Infinitival Perception Verb Complements in a Transformational Grammar," *Problems in Syntax*, ed. by Liliane Tasmowski and Dominique Willems, 105-128, Plenum Press, New York.

Gee, James P. (1975) *Perception, Intentionality, and Naked Infinitives: A Study in Linguistics and Philosophy*, Doctoral dissertation, MIT.

Gee, James P. (1977) "Comments on the Paper by Akmajian," Culicover et al., eds. (1977), 461-481.

Goodall, Grant (1987) *Parallel Structures in Syntax: Coordination, Causatives, and Restructuring*, Cambridge University Press, Cambridge.

Hayashi, Ryujiro (1986) "Remarks on Declerck's 'Pseudo-modifiers'," *Linguistic Research* 4, 48-68.

稲田俊明 (1989) 『補文の構造』大修館書店, 東京.

Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.

Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

McCawley, James D. (1983) "What's with *With*," *Language* 59, 217-287.

McCawley, James D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, University of Chicago Press, Chicago.

Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*, MIT Press, Cambridge, MA.

Postal, Paul M. (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*, MIT Press, Cambridge, MA.

Rosenbaum, Peter S. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, MIT Press, Cambridge, MA.

Safir, Ken (1983) "On Small Clauses as Constituents," *Linguistic Inquiry* 14, 730-735.

榊原弘章（1986)「英語の知覚構文と動的文法理論」ms., 名古屋工業大学／静岡大学.
牛江一裕（1986)「X-bar理論におけるＳと主語」日本英語学会第４回大会シンポジウム『句構造と移動』（津田塾大学）
牛江一裕（1993a)「X-bar理論におけるＳとSmall Clause」『埼玉大学紀要 教育学部（人文・社会科学）』第42巻第１号，1-18.
牛江一裕（1993b)「Small Clause の内部構造と述部制限」『埼玉大学紀要 教育学 部（人文・社会科学）』第42巻第２号，1-13.
Ushie, Kazuhiro（1994）"Syntactic Dual Structures," *Synchronic and Diachronic Approaches to Language*, ed. by Shuji Chiba et al., 557-566, Liber Press, Tokyo.